

monthly JODO

2011
4
April



法然上人追仰会

跼然上入を歩く

二十五霊場十一番

東大寺

指図堂

◆御詠歌◆

さへられぬ
光もあるを
おしなべて
隔て顔なる
朝霞かな

遮ろうとしても遮れない。光とは、まさにそういうものです。光明はあまねく照らすという阿弥陀仏の大慈悲は廣大無辺、まさにこの光そのものなのです。けれど凡俗の衆生は迷いのなかで、まるで、どこもかしこも朝の霞が立ちこめて光を遮るかのように、阿弥陀仏の光明と無縁に生きているように見えるのです。けれど、実はそうではない。お念仏の御教えによって私たちは救われているのです、という意味を詠まれています。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次郎

浄土

2011/4月号 目次

法然上人と念仏（前篇）	竹中信常	2
法然上人を歩く 東大寺指図堂	高橋良和	14
小説 渡辺海旭	前田和男	16
響流十方	小村正孝	26
会いたい人 笈田ヨシさん①	関 容子	30
江戸を歩く	森 清鑑	38
Jフォーラム		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんハネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙裏・法然上人を歩く＋表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く東大寺指図堂



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

浄土誌上ライブラリー 昭和三三（一九五八）年「浄土」二月号より

法然上人と 念佛

竹中信常

1919年 東京生

1936年

大正大学宗教学科卒

大正大学名誉教授・大正大学・仏教

大学講師

浄土宗教学院研究所長を歴任

主要著書

タブーの研究、仏教—心理と儀礼—、

宗教心理の研究、宗教学序説、宗教

儀礼の研究、日本人のタブー、日本

人と仏教、選択集に聞く、仏教への

問いかけ、現代宗教学の理解、極楽

浄土を想い観る

マレット・宗教と呪術

翻訳

東京・白金 隆崇院住職

平成4年6月11日 遷化

享年78才

日本の 仏教とした 宗祖上人

仏教は、私共日本人の生活と思想にとって、切っても切れない関係にあります。御承知のとおり、仏教はインドにおこった宗教ですが、今から千数百年前、日本に伝えられたものです。大体、思想とか、信仰とかというものは、時代や民族によって色々に変るものですが、仏教信仰も、はじめは、一般の人々にはなじみのない、いわば舶来物、輸入品といった感じで、いずれかという、むずかしい経文や、おごそかな儀式、壮大な伽藍といった印象が強かったようであります。当時の貴族や学者達は、丁度、今日、私共が英語を勉強したり、西洋の学問を学んだりするように、漢文、つまり当時の中国語を学んだり、また、政府の公式の文書や、日記などは漢文で書かれたりしまして、中国文化を通じて、仏教の思想や信仰をうけいれていたのであります。

こうして、仏教が日本に輸入されたにしても、そのままの形では、いつまでたっても、輸入品であり、舶来品であつたでしょうが、これを思い切つて、改造して、日本人の思想に、ぴつたりと当てはまるように作りなおした人が、法然上人だったので。私は、法然上人のことを考えるたびに、西洋で、キリスト教を、古い、いかめしい形のカトリックから、新しい、どんな人にもなじめる形のプロテスタントに作りかえた、ドイツの宗

教改革者、マルチン・ルーテルのことを思いうかべるのです。ルーテルが、キリスト教を、王様とか貴族とか金持階級とかといった、特権階級の人々の手からときはなして、百姓や町人達のためのものとしたのと同じく、法然上人も、それまでは、比叡山や高野山のような山の上にあつて、一般庶民の生活とかけはなれた、むづかしいことばかりをいつていた、山門仏教を、山からおろして、京都の町中で、その日ぐらしの貧しい人々にとりかまれながら、仏教の教えを、かみくだいて、やさしく、誰でもが信じ、おこなえる形にして与えて下さったのであります。仏教をいきかえらせ、日本人に本当の仏教を与えたもの、いかえすならば、日本独特の仏教を作り上げた方こそ、法然上人だと申せます。

もちろん、法然上人のほかにも、えらい坊さんは沢山おいでになりました。そして、それぞれ、立派な宗派を立てられて、多かれ少なかれ、日本の精神文化に貢献しておられます。しかし、法然上人ほど徹底的に、根底的に、仏教を建てなおした方は、後にも先にもなかったといえます。それでは、法然上人はどのようにして、仏教を日本をいきかえらせ、日本独特の信仰を確立されたのでしょうか。

私は、今、法然上人は、他の多くの祖師方とはちがつて、仏教を根底からみなおし、つくりなおしたと申します。それは、一体、どんな意味なのか。一口に申しますならば、今までの仏教は、すべて、りくつの仏教である。従つて、それは学問ではあつても、人間の魂を救ふことは出来ない。悩める者の心に落ちつきを与え、迷える者に確信を与え、真に人の心を救いに導くのは、りくつではなく、「信ずる」ということであります。弥陀の本願を信じて、一心に念仏を唱へることのほかにはない。だから、念仏以外の一切の教えはいらない。いや、むしろ、信仰のさまたげになるというのであります。念仏以外は何もい

らない。仏教には、八万四千の法門といって、沢山の教えがありますが、それを全部すべて、念仏一本で行くべしというのであります。こんなに思い切って、大たんなことをした人は、ほかにその類をみないのであります。

こうした強い、き一本な決断力は、一体、法然上人のどこから出て来たのでしょうか。ここで、私共は、法然上人のひととなり、おい立ちについて、ふれてみることにしましょう。

父の 遺言にいきた 宗祖上人

法然上人、くわしくいうと、法然房源空上人は、今からざっと八百二十六年の昔、長承二年（一一三三年）釈尊のお生れになった四月八日の一日前の四月七日、今の岡山県、美作^{みさく}の久米というところでお生れになった。父は漆間^{うるま}の押領使^{おうえし}今の警察署長といった役の、時国^{ときくに}という源氏出身の武士でした。英雄や偉人の生れる時には、色々の言いつたえが残されるものですが、法然上人の場合もそうでした。時国夫婦は久しく子宝に恵まれなかったので、神仏に祈ったところ、ある夜、時国の妻は「かみそり」をのむ夢をみたといわれ、また、その生誕の日には、紫雲がたなびき、屋敷の門前のむくの木に、源氏の白旗に似た一流れの白い布が、天から舞いおりてかかったともいわれました。かみそりはするどい刃物で、頭のするどく働く人を「あの人はかみそりのような人だ」とよくいいますが、法然

上人は母がかみそりをのんだ夢をみたくらいだから、その頭脳の明敏なことはいうまでもありません。で、幼名を勢至丸と呼ばれた。勢至というのは、観音菩薩とならんで阿弥陀仏の脇士として、主として智慧の面で仏様のお手伝いをしている菩薩の名で、神童のほまれのあった法然上人の幼名としては、まことにふさわしい名前でした。

ところが、この勢至丸が九才になった春、となりの国の領主明石定明という者が攻めよせて来て、父の時国に深傷をおわせたのです。勢至丸は別名「小矢児」とも呼ばれて、弓矢の術にたけていたので、子供ながら手なれの小さい弓矢をとって、父を傷つけた定明に一矢をむくい、更に、引上げる敵を追おうとしたのですが、その時、父、時国は勢至丸をとどめて、苦しい息の下で、勢至丸にさとしおしえたのです。「黒谷源空上人伝」という書物には、こう書いてあります。

「我、死去の後、世の風儀に随つてあえて敵を恨ることなかれ。これ偏えに先世の報いなり。若しこの讐を報わんと思わば、世々生々、互に害心をいだいて、在所在所に輪廻たゆることなからん。生ずる者は皆死を悲しむ。愁憂更に限りなし。我、この疵を痛む。人また何ぞ痛まざらん。我、この命をおしむ。人あにおしまざらんや。我が情をもて人の思を知るべし。然らば、すなわち、一向に、専ら自他平等の済度を祈り、怨恨悉く消えて、親疎同じく菩提に至らんことを願うべし」

この言葉の意味は次のようになります。私が死んでも、世間の人のように、敵をうらまさないでおくれ。こうなるのも、前世の因縁なのだ。もし、敵を憎んで、あだをはらそうとすれば、敵もまたこちらを憎み、いつまでたっても恨みはつきないであらう。人間、だれでも生きている以上、死ぬことは悲しい。うけた傷も痛いし、命もおしい。しかし、そう

だからといって、敵だって、傷をうければ痛がるだろうし、殺そうとすれば、命をおしがるだろう。自分の痛み、自分の苦しみを以って、他人の痛み、苦しみを考えてやりなさい。そうすれば、自分と他人との区別はなくなり、一切の怨みや憎しみの心も消えて、みんな一緒に、手をつないで、平和な生活をしてゆくことが出来るようになるだろう。こういう意味になるでしょう。

当時は、復讐ということが奨励され、仇討が武士のつとめとされておりました。平家の清盛なども、死ぬ時に、

「われ死すとも眠れず、必ず源氏の奴ばらの首をひっさげてわが墓前にそなえよ。百万の経巻よりも供養になろう」と、ものすごい遺言をしたそうだし、富士の裾野で曾我の十郎五郎がやった仇討、さては、赤穂浪士の討入りなど、武士のかがみとしてほめたたえられたものでした。こうした日本民族の持つ、悪い一面ともいえる根強い復讐心を、自他平等という、強い仏教的慈愛の精神で打ちくだいて、逆に、敵をもわが身と共にいとおしみ、あわれんでやろうということは、口ではいえても、仲々に実行出来るものではありません。その上、臨終の苦しみの中で、これだけの覚悟を示した時国もえらかったが、それを守りとおした法然上人の、忍従の精神もなみなみならぬものであったことが知られます。

しかし、考えようによると、法然上人が仏道に精進し、空前ともいうべき仏教改革を断行し得た、そのしんの強さ、強じんな意志力、燃えあがる信仰心のみなもととはこうした父の非業の死、しかも、当時の封建社会の根強い風習に敢然と反対し、たち切りがたい怨讐えんしやうの心を見ごとに断ち切りおおせた勢至丸の非凡な精神力にあるものといえないでしょうか。子供の時分の、このような悲愴な印象こそ、法然上人をして、生涯、仏門に精進せしめ

た偉大なる潜在力となったことは、上人自ら成人した後、浄土宗門を樹立した際に述かい
して、

「われ幼稚の昔より、成人の今に至るまで、父の遺言忘れがたくして云々」
と述べておられます。

如来は 罪人のため にこそ

島崎藤村の『千曲川旅情の歌』と云う有名な詩の一節に、

「昨日またかくてありけり

今日もまた、かくてありなん

このいのち、何をあくせく

明日をのみ、思いわずらう」

とあります。この昨日と今日、そして明日という、過去・現在・未来とつづく時間の流れ
の中でこうして、私が、そして皆様方が、共に、その日、その日の生活を送って行く、一
見、何でもないことのようにですが、かみしめて味合いますと、ここには、深い人生の意味
があり、また、仏の教えが読みとられて、まことにありがたいことと申せます。

なぜ、ありがたいのでしょうか。昨日、無事に一日をくらし、けさ、また、気持ちのよ

い朝風の中に、今日一日の働きを前に、元氣よく、私共はめぎめました。こうして、一日、毎朝、毎朝を、喜びと感謝で送りむかえる。ありのままなる天地のめぐみを素直にうけて、また、静かに「とき」の流れにのって行く。心は平静になり、考えは正しく、生活は明るくなってゆく。

このような生活は、誰しものぞみ、すべての人が求める生活であります。そして、これを、仏教でいうならば、このような生活こそ「ほとけの生活」でありますし、また「極楽」の生活であります。ことさら、求めてむずかしい経をよむこともいらず、しいて、つらい修行をする必要もないのです。このような生活をするならば、すべての人は、そのまま仏になることが出来ます。決して、むづかしいことはない。

また、どんな愚かしいものでも、どんな貧しいものでも、また、どんな悪いことをしたもので、こうした生き方に気がついて、すなおに、これをうけ入れてゆくならば、みんな仏になれるのでありますし、極楽浄土の生活が出来るのであります。

法然上人の念仏のおしえは、こういったもののなのです。すなおにうけ入れてゆく心、これを「南無」という言葉であらわされました。何をうけ入れてゆくか。即ち、それは、ありのままなる天地の恵み、人のなさけであります。これを仏の「慈悲」としてうけとって、「阿弥陀仏」という、仏の名号であらわしております。ありがたい、もったいない、そういった心が言葉となつて、「南無阿弥陀仏」と称えられる。

また、逆に、無心の心で、南無阿弥陀仏と称えれば、心はおのづから仏の心に通じ、自らが仏の心ともなるのです。ですから、誰でも、念仏さえとなえれば、仏になれる。また、念仏のほかには、何もむずかしいことはない。

「善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただうまれつきのままにて念仏する……」といわれているのであります。

ですから、法然上人のところには、凡ゆる階級の人々が集って参りました。身分の高い人々としては、当時の天皇であつた高倉帝に戒をさすけられ、また時の関白九条兼実の篤い帰依をうけられました。その他、貴族や武士などで、法然上人の説法の座に列したものは非常な数になります。平の敦盛の首をとつた熊谷次郎直実もその一人でした。また、源氏の武士の一人は、これから戦場にむかい、多勢の人々と殺し合わねばならぬ身のおそろしさに、出陣前の急がしきの寸暇をさいて法然上人のところへ、教えを乞ひに行きました。しかし、上人自身の本当の目的は、こうした上流階級の人々や、学問のある人にあつたのではなかつたのです。

仏教を知ろうにも、これを理解するだけの学問も、教養も、身につけていないもの、ありがたい説法をきこうにも、その日のかてに追われて、時間的にも、経済的にも余裕のない貧しい人々、更には、人前に出ることをはばかりような、いやしい職業の女性、常に人の目をのがれて、悪事を働く泥棒や盗賊、こういった、現実の日常生活の中で、あえぎ、もだえ、苦しんでいる人々に、何とかして仏の慈悲、念仏の功德を知らせたい。これが法然上人のまことのお心であつたのであります。

それだからこそ、住みなれた比叡の山をおりて、ことさらに、人々の集りに便利な京の町においでになり、求めて来るものには誰彼の区別なく、どんな年寄りにも、どんなに愚かしいものにも、よく分るように、念仏の教えを説かれたのであります。

こんな話が伝えられております。当時、京都の内外を荒しまわつて、殺人、強盗、追は

ぎと、悪事の限りをつくしていた、天野の四郎（別名耳四郎）という盗賊が、ある時、法然上人のおすまいに、大勢の人々が入りするのをみて、さぞかしお布施も沢山たまっていることだろうと見込みをつけまして、その縁の下にもぐり込んで、隙をねらっていました。じつとかがんで忍んでいると、きくともなしに、頭の上で法然上人が人々にお説きになつてゐる法話が、耳に入つて来ました。

そこに説かれた教えというのは、どんな悪人でも、おのれの行為を反省し、さんげして、素直な心で念仏を唱えれば、仏は必ず救つて下さる。仏の慈悲とは、むしろ、こうして、自分自身ではどうしようもない悪業の中に苦しんでいる罪人をこそ、まず第一に救うためにあるのだ、ということです。

これをきいた天野の四郎は、今さらながら、おのれが犯して来た罪のおそろしさにおののくと同時に、今からでもおそくない、仏はきつと救つて下さるにちがいない、そう思つて、思わず念仏をとえ、そのままお弟子にもらったということであります。

勅修御伝という法然上人の伝記の一節には、次のように、したためられております。

「室の泊（とまり）につきたまうに、小船一そう近づきたる。これ遊女が舟なりけり。遊女申さく、（中略）この罪業重き身、いかにしてか、後の世助かり候べきこと申しければ、上人あはれみでのたまわく、げにもさようにて、世をわたり給うらん罪障、まことに軽からざれば報酬また計りがたし。……若し余のはかりごともなく、また、身命を省みざるほどの道心、いまだ起りたまわすば、ただ、そのままにて、専ら念仏すべし。弥陀如来は、さようなる罪人のためにこそ、弘誓（こうぜい）も、たてたまえる事にてはべれ……」

播磨の国の室というところに、法然上人がおいでになつた時、遊女がやつて来て、

「私のように罪深いものでも、ほとけさまはおすくい下さるでしょうか」とたずねた。

法然上人は大変あわれに思召しになって、なるほど、そのような職業で生活をしていたのでは、さぞかし罪とがも深く、そのむくいもおそろしいことでしょう。

「……しかし、ほかにこれといって、適当な職業もなく、また、あなた自身もいのちにかえてもというような決心も出来ないようでしたら、そのままよろしいから、ひたすら念仏をとなくて、仏の慈悲におすがりしなさい。阿弥陀仏はあなたのような人をこそ救うために、お誓いをたてられて、仏となられたのです」と申されました。

耳四郎のような盗賊も、室の遊女も、さらには熊谷直実のような、戦いで幾人となく人を殺したようなものでも、すべて、念仏すれば仏になれる。そこには少しの差別もない。身分とか、職業とか、教養とかといった、外見的なものを、すべてはぎとって、念仏をとなえるということにおいて、人はすべて同じだというのであります。阿弥陀仏の広大な慈悲の光を浴びて、その本願の力を信じて、一心に念仏するもの、仏の前に出て、無心に手を合わせる場合人々は、世間的な差別、へだたりをすてて、すべて仏の子として平等無差別の姿になるのであります。或る時、弟子の一人が法然上人にたずねました。

「聖人の申す念仏と、在家の者の申す念仏と、勝劣いかん。答えて曰く、聖人の念仏と、世間者の念仏と、功德等しくして、全く変り目あるべからず」

また、或る時、今度は法然上人が、弟子達に質問されました。

「源空の念仏と、道俗男女の念仏と異いかん」弟子の一人が答えました。

「いかでか、おん念仏の諸人の念仏にすぐれざること候うべき」

(以下次号)

速 報

法然上人大師奉戴 法爾大師

天皇陛下より、元祖圓光東漸慧成弘覺慈教明照和順大師法然上人
に對しまして法爾（ほうに）大師の徽号が加謚され、平成23年3月
16日（水）午前9時30分宮内庁にて羽毛田宮内庁長官より総本山知
恩院門跡・浄土門主 伊藤唯眞殿下に伝達されました。

法然上人を歩く

二十五霊場十一番

高橋良和著『法然上人紀行』(探究社)より抜粋

東大寺

指図堂

法然と奈良東大寺との関係は深い。

二十四歳のとき、比叡をくだって南都に赴きそれぞれの寺の碩学を訪ねている。また治承四年(一一八〇)十二月二十八日、平重衡が東大寺に火を放ち、大仏殿を炎上させたその後、大仏殿造営の大勸進を法然に依頼したときも、後白河法皇のねがいではあったが、勸進職につけば折角比叡をくだって念仏しようと思っているのに、その素意がくずれてしまうということで辞退を申出ているし、その代りに醍醐の後乗房重源を推せんしている。

このようなことは、南都に大仏殿造営を荷負う人物が奈良にいなかったことをあらわすことにもなるし、また一方、

法然の偉大さが近隣に知れわたっていたことにもよると思う。

また建久二年（一一九一）に東大寺の大仏殿の造作中に法然を請じて、その軒の下で念仏会を営み浄土五祖の影像をかかげて、浄土三部経を講説していることなどで関係は深い。

大仏殿の西方百米ほどのところにある指図堂は、大仏殿建立の際に、法然の推挙で大勧進職についた俊乗房重源がここで大工、作官などの番匠を指揮したところとつたえられる。堂内に法然の絵像がまつられている。

この重源は法然より十二年も年上であったが、真言宗の醍醐から法然に帰依した人で、円頓戒をうけている。このことは知恩講私記に出ているのみであって、そのほかの伝記には出ていないらしい。

そのなかでは東大寺長老ということで重源をあらわしているし、法然から円頓戒をうけ法然はまたこの重源が宋の国に留学するとき、浄土五祖の影像を求めることを依頼し、重源も約束通りそれを持ちかえっている。また醍醐本という「法然上人伝記」では、大原問答の際に弟子三十人をつれて聴聞していることもあるほど親しい間柄である。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十二回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

聖母マリアは観音菩薩である!?
異教徒たちの比較宗教問答



鉄血宰相の辞任とマリア祭

ストラスブルクでの留学生生活は、海旭にさまざまな果実をもたらしてくれたが、なかでも滋味ゆたかだったのは、宗教家として、世界の最先進国で生きた諸宗教の実相を体感できたことである。とりわけ脱亜入欧・文明開化をめざしつつある日本にとって、お手本とする西欧文明の精神支柱であるキリスト教がどのような実態にあるのかを知ることが、再生と改革が期待される既成仏教にとってばかりか、近代化が急がれる日本にとっても、大きな意義をもつものであった。

もちろん、これは日本においては体得できない。しかし、海外にあっては英国国教会が支配的なロンドン、あるいはカトリック系が支配的なパリに留学していたら、また同じドイツでも新教が支配的なベルリン、かたやカトリックが支配的な南ドイツのミュンヘンに留学していたら、その地での支配的な教派の一

方的な実態だけを見て全体を見通すことはできなかつただろう。

一方にかたよることなく、ヨーロッパ全体の宗教事情を広く知るには、実はストラスブルクは格好の場所であった。ストラスブルクには、ロイマン教授のような碩学と諸宗教の貴重な原典文献が集まっており、比較宗教研究には大変に画期的だが、生身の人々による生きた宗教を比較的に体感する場としても最適であった。

そのことを海旭がはつきりと自覚できたのは、留学して半年あまりたった年末の、マリア祭のときだった。マリア祭とは十二月の八日、聖母マリアの受胎を祝う行事である。この日、世界中で、カトリック信徒たちが教会のミサに集い、司祭を先頭に祝賀パレードが繰り広げられ、厳かな雰囲気包まれる。

「しかし、このマリア祭は異様さにおいて別格だ」と北ドイツからストラスブルク大学へやってきた研究仲間は、プロテスタントゆ

えに冷ややかに言って、「比較宗教研究のためにもぜひ、朝から晩まで、じつくり時間をかけ、街中を見ておくといい」と勧めてくれたのだが、なるほど、必見の値打ちは大いにあった。

朝から市内の大小の旧教寺院で鐘が打ち鳴らされるなか、教会ではミサと説教、賛美歌を歌いながらのパレードとあらゆるカトリックの儀式が行なわれるが、なんといっても圧巻は夜である。街のシンボルであるノートルダム大聖堂の百四十メートルの高塔が、夕暮れから、ガス灯と電灯と灯油ランプで彩られ、九時になると様々な薬品を燃やして、尖塔を赤くあるいは青く輝かせる。そして尖塔が従える堂宇の棟々も、また六万とも七万ともいわれる市中のカトリック信徒たちの家々も、貧しきは豆ランプ、富めるはガス灯を掲げ、軒先に美麗な聖母を飾って、祝祭気分を盛り上げる。

街をあげての桁はずれた華やかさに吃驚す

る海旭に、案内のドイツ人プロテスタントは言った。「旧教で凝り固まった南独のミュンヘンやケルンでも、こんなお祭り騒ぎをやっているとは聞いたことがない」

海旭は思わずこう問い返した。「たしかこコストラスブルクは、十六世紀、いまだヨーロッパ中で教皇が絶対権力をふるっていた時代、プロテスタントによる宗教改革、ヒューマニズム運動の中心となった町ではないか。それなのに、この時代錯誤の大騒ぎはなんだ」「ワタナベ、それはビスマルクの失脚と関係ある」と友人は言って、詳しくこう説明してくれた。

統一なったドイツを鉄（大砲）と血（兵隊）によつて最強の「帝国」につくりあげようとした宰相・ビスマルクには、「邪魔者」が二つあった。一つは、ローマ教皇の威信を楯に南ドイツに蟠居する旧体制の象徴たるカトリック教会。もうひとつは資本主義建設の矛盾に異議申し立てする社会主義という新興勢力

だ。宰相はまずカトリックと対決、四千人もの司祭を投獄するほどの大弾圧をはかった。かたや社会主義者に対しては、カトリックとの対決をゆるめて、社会保障制度を世界に先駆けて導入するいっぽうで「社会主義鎮圧法」を制定して禁圧するといういわゆるアメとムチでのぞんだ。

しかし、海旭がこの地へ留学する十年ちょっと前の一八八八年、ヴィルヘルム二世が二代目の皇帝に就任すると、カトリックと社会主義の新旧二つの勢力と融和的政策をとり、これに抵抗するビスマルクは辞任に追い込まれるのである。

「ここで連中は図にのって存在感をしめそうとして、本来は地味なマリア祭をやたら賑やかにしたのさ」と、プロテスタントの友人は、いかにも苦々しげに、憤懣やるかたないという調子で言った。「この町はプロテスタントのものではないぞと」

海旭が留学する三十年前の一八七一年五

月、普仏戦争に勝利したドイツ帝国は、ストラスブルクを含むアルザス・ロレーヌ地方を占有。友人によれば、ドイツ領になったことで、当初はフランス系カトリック住民の流出があったが、旧ドイツからの移住がすすみ、駐留兵士一万六千に、文民五万を数え、ストラスブルクの人口は二十万を超えるまでになった。そもそもドイツ本国はプロテスタントが優勢なので、ふつうならプロテスタントが増えるはずなのに、事實はプロテスタント系がややへり、カトリック系が増えた。その理由は、友人の説明のとおりであった。

友人はさらに、「旧教の示威と跳梁は、マリア祭の狂騒ぶりにとどまらない。それだけならまだ許せるが、それより問題は、大学教育への介入だ」と言い募った。「ストラスブルク大学に旧教の神学科をつくっただけではない、カトリックの僧侶を神学科以外の学科の教授にするなどのごり押しだ。こんな学問の自治と中立性をこわすことをされては、中

世以来、ヨーロッパに冠たる学府の街は地に墮ちてしまふ」

「ああ、そうだったのか」と、海旭は眼からうろこが落ちた。ドイツなのだからプロテスタントが支配的だろうとばかり思っていた書齋の知識を大いに恥じるとともに、げに政治と宗教は不可分の関係にある、超然と宗教の研究にだけ没頭していれば事足りるわけではないと思ひ知らされたのだった。

マリア信仰に宿る大乘の精神

十一時をまわったころ、燦然たる輝き放っていた尖塔から、突如電灯とガス灯の明かりが消された。やがて巨大な尖塔は漆黒の夜の闇にとけこんでいき、塔の壁面のところどころでぼつりぼつりと明かりを点していた灯油ランプも次第に光りを失っていく。そのさまは、さながら晩秋の螢の物悲しさを思わせた。「これぞ旧教の哀れな末路だな」とプロテスタントの友人はつぶやくと、「つづきの議論

は、近くの居酒屋で、ビールかワインをいっぱい傾けながらやろう」と海旭を誘った。居酒屋では、マリア祭に参加していたカトリックの革新派の友人も合流、議論はいっそうもりあがった。

「議論はお手やわらかに願うよ、諸君」とカトリック革新派が言うのに、プロテスタントは意に介さずに言った。「だいたいバチカンはいケイゼルの弱点につけこんで勢力を伸ばすために、二十世紀という今日、欧州の中心で、こんな過去の遺物をもちだして大騒ぎをするとは……」

「たしかに、まことに摩訶不思議の極致。極東の異教徒にも到底飲み込めない」と海旭も同調した。

これに勢いを得て、プロテスタントはつづけた。「ローマ教会は同じ手口を用いて、俗世界の政治にまで羽翼を伸ばしている」。ピスマルクのカトリック弾圧に対抗して、中央党という政党を結成、議会へ議員を送り込ん

で現世的影響力を強めようとしたことを指していた。

「国内だけではない。布教にかこつた植民地での蛮行をみよ。宣教師を侵略の尖兵とするやり口は、大昔日本にもやってきたイエズス会士たちのそれと同じじゃないか」と海旭が議論を引きついだ。「こうみてくるとノートルダム大聖堂の高塔の絢爛たる輝きは、無間地獄の火が地底から燃えぬけたように見える。賛美歌の歓呼は叫喚の号泣に聞こえる。僧たちはミルトン失楽園の大魔王小魔王、民の膏血をしぼって盛んに腐敗頹落の計を講ずるように見える……」

仏教の地獄絵図を用いた比喩が正確に理解されたかどうかはともかく、プロテスタントは海旭の援護射撃に意を強くして言った。「仏教徒にそこまで斬ってもらえるとは、これは力強い、大いにありがたい」

押され気味で、いささか分の悪いカトリック革新派が哀訴した。「僕だって旧教がいい

とはいっていない。たしかに夜郎自大だ。だからこそ内から改革をしようと運動をすすめている。こうやって今夜だって、君たちと議論をするのもそのためだ。しかし、旧教はなにもかもだめというのは……マリア祭だって……」

すると海旭は今度は旧教徒の擁護にまわった。「それは、そのとおりだ。悪いのは旧教の政治主義であって、僕は、マリア崇拜を根本的に悪くいうつもりはない。マリアの「不穢托胎」の不可思議さをどうこういうつもりはない。ユダヤの間の抜けた赤ら顔の田舎代官のような神様よりは、いくばくか気がきいていて、人情に適しているかもしれない」

風向きが変わったのに、プロテスタントは戸惑って言った。「おいおい、ワタナベ、きみは旧教を批判するくせに、その墮落の根本のひとつであるマリア信仰は擁護するのか。それは大いなる矛盾じゃあないか」

「キリストの磔刑の像には贖罪という酷薄な

法律思想がひそんでいる。それに比べれば、マリアは純粹無垢の慈母の愛で、キリスト教の精華といつていい」と海旭は言い返した。「いつたいマリア信仰がローマ教会に起こったのは、人性自然の欲求からきたように僕には思える。ユダヤ教の神権思想とローマの法律思想とでこねあげられた冷酷無情な教皇政治に、民心が耐え切れないのは知れたことで、ここにマリア崇拜が出たのさ」。

海旭はつづけた。「それにつけても、この美しい信仰を、やれマリアは穢れているの、穢れていないのと神学的審判をし、最後はローマ法王が裁可を与えるのはなんとしても承服できない。元來信仰というものは、人間の本来から自由に生まれるもので、これこそが人間の靈性の最大の權利ではないか。これを法王に法文で定められてたまるものか。ローマ教会の迷妄千万はここにある。その腐敗や弊害もここから出ている」

タンホイザーのエリザベート姫こそマリアの化身

酒がすすむにつれて、海旭のマリア擁護論は、新旧ふたりのキリスト者をいっそう驚かせる大飛躍をとげた。すなわち、「聖母マリアは観音菩薩」論である。海旭によれば、それはいま思いついたことではなかった。「この夏、スイスの山奥の修道院を訪れたときのことだ。聖母マリアの像を眺めていると、僕の脳裏にひらめいたのは、観音經普門品の一節だった」と言つて、そのくだりを誦（そらん）じてみせた。

応以婦女身得度者、即現婦女身而以說法（まさに婦女身をもって得度すべき者は、即ち婦女身を現じて而も為に法を説く）

「それはどういう意味だ」と問うキリスト者二人に、海旭はこう講釈をした。

直訳すれば、「婦女たちのために、観音菩薩は婦女に変身をして説法をした」ということだ。「婦女」とはヒンズー教の司祭者・婆羅門の妻だが、その含意は、仏教にあっては男女の間に一切上下の隔たりや差別はない、地位や出自や資産で人の価値が決まるというのは俗界の偏見であり、修行すれば誰でも得道できる。そもそも観音菩薩は阿弥陀如来が主宰する極楽浄土へ衆生を導く慈悲の仏とされ、さまざまな姿に身を変えて救いの手をさしのべる。観音経はこれを説いたものだが、いま海旭が誦じたこのくだりがもとも印象深いために庶民たちのあいだでは、古来観音菩薩は「女性」として崇められてきた。同じくマリアもキリストの父性神を補完する「聖なる母性」として慕われてきた。

「したがってマリアと観音菩薩は大いに近い。マリアのなかにこそ、大乘の精神が宿っているといえるのではないか」と海旭は言っていて、こう付け加えた。「江戸時代、日本では

キリスト教は禁じられていたが、キリスト教を棄て切れなかった人々の中には、マリア観音、つまり観音菩薩をマリアに見立てて信仰を持続させた者もいた。これも聖母マリアと観音菩薩が近い証しといえるのかもしれない」この隠れキリシタンのエピソードに、とくにカトリック改革派が好奇心を刺激されたらしく、海旭に質問を発した。「ところで、碩学のきみに下世話なことを聞くのは失敬のきわみかもしれんが、あえて訊く、聖母マリアと観音菩薩、どちらが好きかね」。

「よくぞ訊いてくれた」と莞爾と笑って海旭が返した答えは、二人のキリスト者の予想を裏切るものだった。「観音さまより聖母マリアのほうがいいね」

あっけにとられた友人は口々に、「おい、おい、僕らのようなキリスト者ならともかくも、仏教徒のきみがそこまで言っているのか。ワタナベ、理由を聞かせろ、比較宗教論的な理由を」

すると海旭は「答えは、ワグナーのオペラ『タンホイザー』のエリザベート姫にあり、だよ、ご両兄」と言ってまたまた驚かせた。「このオペラにはマリア思想が全編にあふれている。愛するタンホイザーの罪の赦しを願って、エリザベート姫がマリアの像に祈るところは、観客の感涙をさそうこのオペラの名場面だが、タンホイザーの罪をあがなうために自らの生命を捧げんとする姫こそ、永遠に清くうるわしいマリアそのものと見ていいのではないか。これぞ利他滅私の慈母の愛。大乘的な精神ではないか。いっぽう観音菩薩はどうだろうか……」

こう述べて、海旭はひとしきり観音菩薩論を披瀝した。

仏教が日本に渡来する前、五世紀以降の中国でも、観音菩薩像をつくることが盛んになり、先祖の追善や現世利益をもたらす象徴として、「家々観世音、処々観世音」のことわざを生み、民間信仰として浸透していった。

日本では、遅れて飛鳥時代以降だが、仏教が中国から伝来したときに観音信仰も似たような形でもたらされ、平安時代の浄土信仰の流行とともに、現世利益と補陀落の来世信仰をかねるようになった。観音經によると仏は三十三の姿に化身して法を説いたことにちなんで三十三箇所西国巡礼なども盛んになる。こうした観音信仰をめぐる歴史背景を紹介してから、海旭はこう言った。

「わが仏教の観音さまは、そうした現世利益的なものと来世逃避的なものをあわせもっていて、どことなく取り留めがない。これにくらべれば、マリア信仰のほうがむしろ純粹無垢であって、至純の愛を母の姿で示したところは、人の本性たる靈性に近い。つまり大乘の精神が宿っている」

「またまた大胆なことを……。ワタナベの言説は、いつも論争的で刺激的だ」とカトリック革新派は言うのと、「さ、さ、もう一杯やって、大いに論を戦わせよう」とアルザス・ワイン

をもう一本あげた。

海旭は、グラスにつがれたワインをひと口ぐびりと飲ってから、つくづく思った。こんな議論は日本ではとてもできなかったろう。ほんとうに異教の地に留学してよかった。

研究室で文献と格闘しているだけでは得ら

れない、まさに生きた比較宗教学の実地演習であった。

夜はふけていったが、遠い異国の地での異教徒たちの比較宗教議論はいつはてるともな

くつづくのだった。
(つづく)

東北地方太平洋沖地震被災者救援義捐金のお願い

平成23年3月11日東北地方太平洋沖地震が発生し、広範囲において多くの犠牲者・被害が報道されています。被災されました多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。犠牲になられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますと共に、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

被災者救援のため災害救援義捐金の受付を開始いたしております。皆さまにおかれましては趣旨をご理解いただき格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、お寄せいただきました義捐金は、この災害で被災された方がたの救援、被災地の復興支援などとして活用させていただきます。

【お振込み先】

加入者名 浄土宗災害救援義捐金

振込先（郵便振替）01010569420

※払込取扱票の通信欄に「東北地方太平洋沖地震」とお書きいただきますようお願いいたします。

【問合先】

浄土宗社会国際局

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL 03-3436-3351 FAX 03-3434-0744

ごくらくも かくやあるらん あらたのし
とくまいらばや 南無阿弥陀仏。

(法然上人)

(流罪るざいのため配流地の讃岐さぬきに赴く途中、

立ち寄った島で土地の人々からの歓待を受けて)

極楽浄土もまた、このように愉しいところなのでしうか。

ああ、早く行つてみたいものだなあ。南無阿弥陀仏…

念仏行脚に随行して

法然上人が亡くなって八百回忌正當しやうとうとなった一月二十五日夕刻、陽もかげりはじめ寒さが増してきたにもかかわらず、東京・芝の大本山増上寺境内には僧俗男女多数の姿があった。大殿だいでん（本堂）背後にそびえる東京タワーの照明が薄暮の空に輝き出す。参道にはいくつもの灯籠が並び、灯された火に「南無阿弥陀仏」の文字が浮かび上がる――。

大遠忌を記念して行われた「念仏行脚」出発時の模様だ。増上寺から旧東海道などを南下、京都の総本山知恩院まで約六百キロにおよぶ道のを三十日かけて目指す。参加した行脚者（全行程踏破者）は二十五歳から八十三歳までの九名の僧。これに、東京はじめ、途中通る神奈川、静岡、愛知、岐阜、三重、滋賀、京都の各エリアで当地の浄土宗寺院から有志僧侶や檀信徒が加わり、「名号軸」と「光明偏照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨」の経文が記された「撰益文軸」の二幅の掛け軸をリレー形式で受け渡していることとなっている。

黄昏たそがれの午後五時、増上寺の三門をくぐって出発。列は東京教区の僧侶や檀信徒を先頭に、墨染めの衣に鼠色の袈裟、手甲、脚半、すげ笠という出で立ちの九名が続く。ビジネス街の歩道を進む。ゆっくりとしたテンポで「ナムアーミダーブ」と念仏が称えられる。長い隊列のところどころから名号が書かれたの

ほりがはためき、サラリーマンやOLなど道行く人の目を惹きつける。

この大行事に、三日間だけではあったが随行する機会を得た。一か月におよぶ行脚ともなれば、荷物、装備も相当な量になる。健康を損ねることも考えられる。そこで行脚を安全かつスムーズに進められるようにと、二台のサポート車が添うことになり、その運転とお世話の任に当たることになったのだ。

一日に平均二十キロ以上の行程。もちろん、歩き通しはできない。一時間半程度に一回の割で休憩をとるのだが、その会所として道沿いの浄土宗寺院を中心に協力を仰いだ。今回の随行で実は、この協力をしてくださった寺院、そして檀信徒の方々のありがたさをつくづくと感じさせられたのだ。

二月一日午後、行脚と合流予定の静岡県三島市のお寺に向かった。一行の到着までまだ一時間近くもあろうかというのに、境内にはご住職はじめ檀信徒多数が待ち構えてくださっている。偉業を遂行中の一行に対する尊崇の言葉を交わしている。遠くに隊列の姿が確認できると、誰に言われるでもなく山門前に整列し、合掌、そしてお念仏。本堂に入ると一行は、二幅の掛け軸を堂内に祀って法要を営む。その後、お茶をいただいたり、昼どきには食事の場とさせていただく。このようにして計百軒以上もの寺院にお世話になった。

とにかく感じ入ったのは、その際の手厚い接待である。三日間のうちには雪がちらつく底冷えの日もあった。しかしこの寺院でも、檀信徒らは外で待つてくださっており、堂内の暖房と茶菓の準備にも余念がない。檀信徒が多数集い、地元の食材で手料理を作ってくださいましたお寺もあった。トラックの排気と闘いながら遠路歩いてきた一行にとって、笑顔とお念仏、「お疲れさまでした」のあたたかい声での出迎え、そしてさまざまなもてなしがどれほど心と体の安らぎとなったことだろう。もちろん、各エリアで行脚に加わってくださいました、またサポートをしてくださいました僧侶の方々の力添えも極めて大きかった。

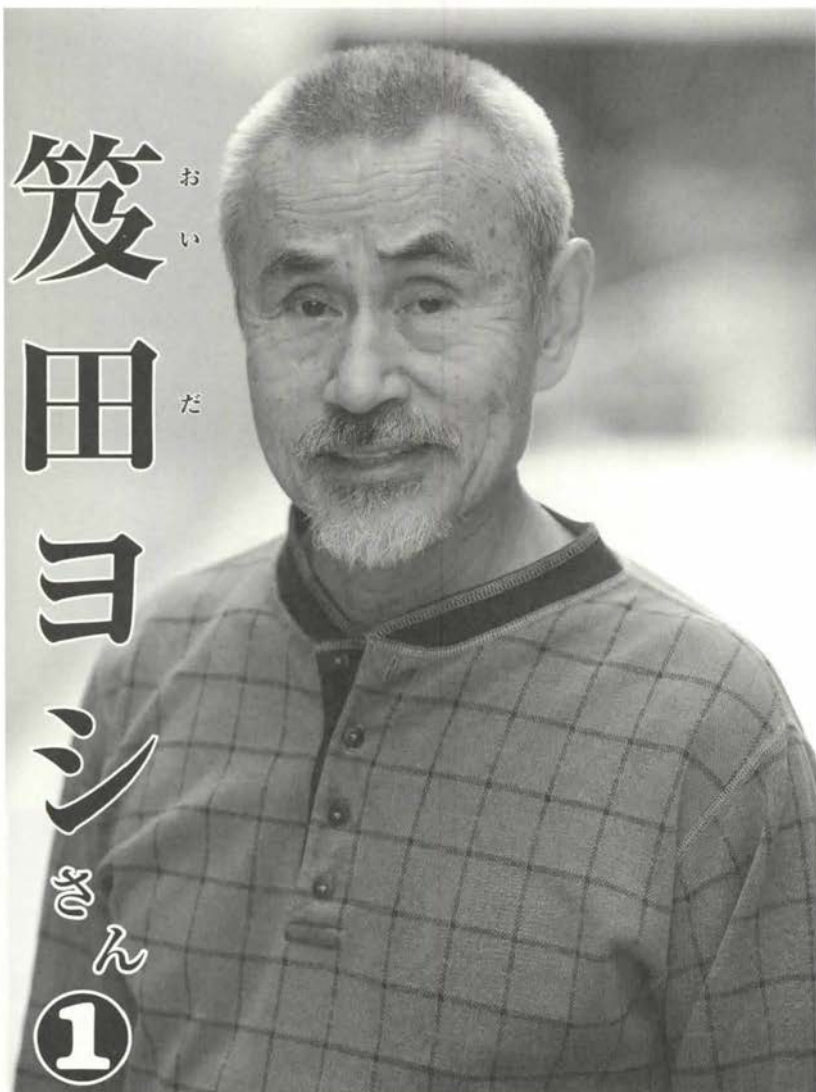
二月二十三日、全員が無事に知恩院到着。踏破者の皆さん、そして行脚を支えてくださった協力寺院とその檀信徒の方々に對し、信仰のあるべき姿とその絆の強さを教えてくださったことに、心から感謝を申し上げます。

このたびの東北地方太平洋沖地震、及びそれに伴う原発事故により、今わたしたちの国は大変な事態となっております。総・大本山の大遠忌行事は延期や短縮。大変残念にはありますが、それよりも今は、被害を受けた方々へのお見舞いと、亡くなられた方々の安らかな往生浄土、そして我が身を省みず復興に尽力して下さっている方々への謝意を、被災者を家族に持つ者のひとりとして謹んで申し上げます。(小村正孝)

連載

会いたい人 関 容子

お
い
だ
筈
田
ヨ
シ
さん
①



撮影／タカオカ邦彦

笈田ヨシさんは俳優として、また演出家として、活動の場を世界各地で展開している。

最近の日本では平成二十二年十二月、『春琴』（谷崎潤一郎『春琴抄』『陰翳礼讃』より）の舞台に佐助を想定させる役で出ていたし、映画『最後の忠臣蔵』にも豪商茶屋四郎次郎という重要な役で出演している。

笈田さんが文学座（のちに劇団四季へ移行）の若手俳優としてこれからというときに、突然フランスに渡ったのは昭和四十三年のこと。

それから二十年後の東京・セゾン劇場（現在のル・テアトル銀座）、ピーター・ブルック演出の上演時間九時間に及ぶ『マハーバーラタ』にただ一人の日本人俳優として出演。その存在が大きな話題を呼んだものだった。

そしてまた二十何年かが過ぎ、去年六月のコクーン歌舞伎『佐倉義民伝』の客席にいる笈田さんを偶然見かけた。池部良さんのマネージャー國實さんが御一緒だったので、紹介をお願いし、私が文学座アトリエ公演、ミュ

ツセの『マリアンヌの気紛れ』（昭和三十三年）を観ている、と言うとひどくびっくりなさったようで、それが今回のインタビュウに結びつくことになった。

笈田さんは半年前の約束通り、『春琴』の昼夜二回公演の合間に、何度か時間をとってくださった。

まず私が半世紀以前に観た『マリアンヌの気紛れ』から受けた衝撃を笈田さんに語る。

マリアンヌ（加藤治子）という美しい人妻に青年セリオ（笈田さん）は恋している。友だちの美男のオクターヴ（仲谷昇）に悩みを打ち明けると、その思いの丈を伝えてくれるが、マリアンヌはオクターヴ自身のことかと思いい、気紛れに密会を承知する。喜んでその場に出かけたセリオは、マリアンヌの夫がさしむけた刺客に殺されてしまう。信頼していた友はこの罠を知っていて自分を裏切ったのか、というセリオの誤解は、その死によって



苅田さんにとって思い出深い作品となった「マリアンヌの気紛れ」

永遠に解かれることはない……と客席で思ったときに、これからの私の人生でオクターヴみたいにも言いわけもできず、絶望的な悔み方をするところがあるのだろうか、と戦慄した。それで可哀そうなセリオ役者（当時は笈田直彦）の名が、強く脳裏に刻みこまれた。「そうでしたか（笑）。あれはぼくが文学座に入って、二本目です。デヴィューはやはり同じ年の『人と狼』（中村光夫）で、芥川比呂志さんの息子で岸田今日子さんの弟、といういい役でした。その役に決まっていた杉裕之って、喜劇俳優の杉狂児さんの息子ですけど、彼が酔っ払って塀によじ登って足をくじいて、急遽二週間前に代役がぼくに決まったわけです。そのときにはかかってなかったくらい褒められたんですが、続く『マリアンヌの気紛れ』。これは稀代の悪評で（笑）、とにかくぼくがせりふを言うとき客席から失笑が起きるんですからね。でも賀原夏子さんは、別にうまくはないけどあの人存在感があっていい

わ、って、ぼくを認めてくれた最初の人です」賀原夏子ほのちに演出も手がけるほどの人だったから、笈田さんの未知の可能性を見たのだろう。

「ぼくは文学座研究生の入試のときに、そんなつもりはなかったけど態度が生意気だったらしくて、でも、あの子面白いわよ、って引っ張ってくれたのも賀原さんだったんですって。慶応の学生時代、ぼくは民藝に入りたかったんです。左系の劇団だし、芸術的表現と社会的な関係、みたいなものに興味がありませんからね。でもそのころ民藝は研究生を募集してなかった。一方、文学座は獅子文六、久保田万太郎、三島由紀夫、芥川比呂志、福田恒存……と、錚々たる顔ぶれだったし、そこへ入って演技の勉強をして、十年したらやめて、ぼくの一座をこしらえて演出をしよう、と思ってたわけですから（笑）、やっぱり生意気でしたね。入る前は誰でもそうだけど自惚れがありますよね。自分では十年で名優に

なれると思つてたけど、入つてみたら周りのみんながヘタだヘタだと言つて、先輩からお前才能がないからやめたほうがいいんじゃないか？ つて言われて、せつかく始めたのに口惜しいから、バレエ、モダンダンス、能楽、日本舞踊、義太夫と、いろんなものを習つて、一生懸命やつたけどやつぱりダメ。もう悟つたときには、二十八歳になつてました。でも大学出てすぐなら固い会社にも雇つてもらえるけど、もう遅い。もし役者がダメだったら親父の会社（自転車製造）へ入ればいい、と思つてたのに、その親父も二年前に亡くなつて、会社もつぶれちゃつた。だから行き場がなくて、役者続けるしかない。しかし自分にはヘタだと意識したときに、先輩から、お前芝居続けてもいいんじゃないか？ つて言われましたからね。そんなものかもしれまん

筈田さんは昭和八年に神戸で生まれた。本

名は飯田好男。

「文学座に入つたら三年先輩に飯田というのがいて、名前呼ばれると二人で返事しちゃうからお前が変えろ、と言われた。それで飯田の上に丁寧におの字をつけて、筈田直彦という芸名にしたんです。途中から姓名判断で筈田勝弘に変えて、その後外国で暮すようになると、向うじゃみんなファーストネームで呼ぶから、本名のヨシでばくのことを覚えてる。それから、芸名は筈田ヨシです」

筈田さんは、うんと小さいときからとても芝居が好きだったという。

「物」ころついたときからそうでした。買つてもらう物と言えばお多福やひよつとこのお面。それをかぶつて芝居の真似です。小学校一年のときから神戸の新開地の劇場へ通い出して、歌舞伎や文楽や剣劇なんかも観る。あんまりよく行くんで母親がついて来られないで、女中と一緒に行ってました。学校休むのも、風邪ひいたとかおふくろが適当に言つ

で、ちゃんと協力してくれてね（笑）

笈田さんの曾祖父は文楽の三味線弾きだったそうだから、生まれつき芸好きの血が流れていたのだろう。

「まあ、それはあとで知ったんだけどね。やっぱり祖母が芸ことが好きで、うちには義太夫のレコードがたくさんありました。で、文学座に入って、日本の語りの芸を勉強しようと思って、まず長岡輝子さんにすすめられて狂言。ぼくは関西育ちですから大藏流の狂言を十二、三歳のころから習ってたんですが、文学座に入ってまた稽古を始めたんです。五年くらいやって、なんとかしゃべりが狂言らしくなったから、今度は文楽三味線の鶴沢重造さんに義太夫を習って、素人の義太夫コンクールで『寺子屋』を語って優勝して。師匠からは文楽の道へ進まないか、と言われたりしたけどね。また先輩から、義太夫なんかやってるとシェイクスピアができなくなるぞと言われて、次は講談を習いたいと思ってたけ

ど、ヨーロッパに行くことになり、結局習いませんでした。ほかにもいろいろ剣道、合気道も稽古したし、しかしどれも半素人の域を出ませんけど」

笈田さんは物ごとを探る方法として、垂直思考よりも水平思考を採るという。

「地中のダイヤモンドを見つけるのに、ここと定めて深く掘り下げるのと、広く浅く探っていくのとあつて、ぼくはいまだに水平思考ですよ。役者をやったり演出をやったり。演出も、オペラ、ダンス、演劇と、あちこち動き回ってます」

話は先に飛ぶが、笈田さんが演出の勉強をするためにピーター・ブルックの元に行き、まずは役者をやらされた。最初の役は『テンペスト』（シェイクスピア）の風の精だったが、衣裳はそれぞれの稽古着で、とブルックの指示が出た。欧米の役者たちはGパンとかトレーナーだったけれど、笈田さんは自分は日本人だから着物にしよう、と思い立つ。



上半身を見せる「サロメ」のナラポト役に身体を鍛えた笈田さん

「それも、紋つき袴で出ました。狂言の稽古が足の運びなんかに役に立って、四十何年も前の話ですから日本というのがまだ珍しかった。取材で何を勉強してきたのか？ と訊かれて、狂言や義太夫、と答えたら、向うが勝手に

間違えて日本の狂言の役者だと書かれたものだから、日本人からは、あいつはハッターリだとかベテン師だとか悪口言われましたけどね」
文学座時代に話は戻って、『マリアンヌ』の二年後、笈田さんに大役がついた。『サロメ』（オスカー・ワイルド）の近衛兵の若い軍長ナラポト役。サロメの誘惑に負けて予言者ヨハネの幽閉されている地下牢のふたをあけ、責任をとって自決する。

「サロメが岸田今日子さん。ヨハネ役の芥川比呂志さんが病気で出られなくなつて仲谷昇さんになつたんで、仲谷さんの役がぼくに回つてきたわけです。演出は三島由紀夫さんで、ナラポトは上半身かなり裸を見せるから筋肉を鍛えなきゃダメだと言われて、一緒にボディビルに通わされました。おかげで親しく話が聞けてよかつたですけど」

ナラポトが自らの胸を短剣で刺すところは、多分三島が大好きなシーンだったのだろう。さらに三年後、今度は『調理場』（アーノ

ルド・ウエスカー」のピーター役で、笈田さんは注目を集める。これが出世作。その三年後の昭和四十一年は、文学座に入って十年目の年だった。一月の舞台で『女学者』（モリエール）のトリソタン役をつとめる。

「杉村春子さんと荒木道子さんが姉と妹で、小川真由美さんが杉村さんの娘。この三人から惚れられる詩人の役で、稽古のときは杉村さんからずいぶんダメ出しされたんですが、それがNHKでテレビ中継されたんです。あのころ、それでもなくちゃ自分の舞台姿なんて見られなかった。そのときぼくは三十二歳。杉村さんがテレビを見て、なんだかんだ言ったけど、やっとあなた、役者になったわね、って初めて認めてくれました。そのあと最初の予定通り文学座をやめて、一年間何もしないでいましたけど、浅利慶太さんが慶応の先輩だったので劇団四季に入れてもらって、それからじきにピーター・ブルックのところへ行ったんです」

昭和四十三年四月のある日、長岡輝子さんから電話があった。

「あなたパリに行く気ない？ フランスのジャン・ルイ・パロウさんから鈴木力衛（仏文学者）さんに手紙が来て、日本の俳優を探してるそうよ。パロウさんは毎年夏に演劇のフェスティバルを開いて各国の演劇を紹介してるんだけど、今年はイギリスのピーター・ブルックを招いて『テンペスト』の実験劇をやるんですって。観世寿夫さんや野村万作さんは？ って鈴木さんに言われたけど、あの人たちはもうスケジュールがいっぱいなんですって。それであなたを推せんしたの。あなた、狂言や義太夫を習ってたでしょ」

出発までたったの二十日間。なんの準備をする時間もないまま、笈田さんはのちに『俳優漂流』を著わす旅の第一歩を踏み出した。

（つづく）

第三十八回

江戸を歩く



深川木場に向かつて歩く

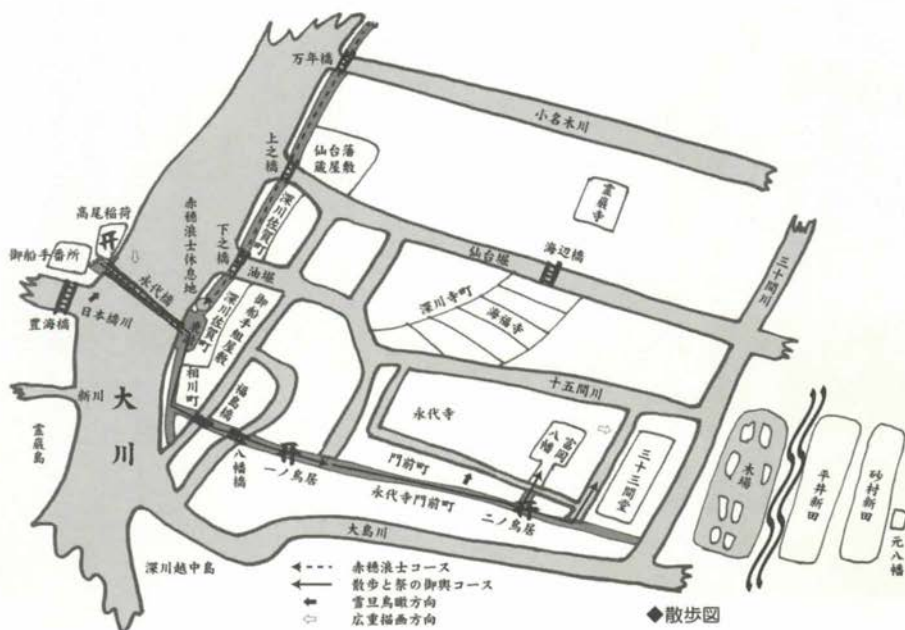
森清鑑
大江戸ウォーカー

元八幡

三十三間堂、三十間川の東隣に広大な木場光景が繋がる。木場からさらに東へ行くと、大名所轄の平井新田、砂村新田へと続く。広大な埋立て農地である。そのまま東に行けば、南北に流れる、大きな中川にぶつかるがその手前に元八幡社がある。歴史は古く鎌倉時代から鎮座し、源頼政、太田道灌が崇拝。ここが富岡八幡宮の元宮で寛永六年（一六二九）に深川に移され、名前も富岡八幡に改められた。江戸時代を通じて、この社は、富岡移転後も残され、人々はここを元八幡と呼んだ。広重が描く「元八幡鳥居」の図は遠方に江戸湾が広がり、水と緑と桜のとてつもない美しい光景である。しかし、たびたびの洪水の危険から深川に遷宮されたのである。

相撲と祭り

富岡八幡のことを江戸っ子は通常、深川八



幡と呼ぶ。この八幡の呼び物はなんといつても相撲と祭りである。貞亨元年（一六八四）、江戸で初めて春秋二場所の勧進相撲が幕府によって許され、この境内で開催。以後、百年に亘り続く。その後、勧進相撲は両国回向院に引き継がれていくが言わば江戸相撲の元祖的存在である。勧進相撲とは神社修復の費用を賄うという名目で神社の境内で開催が許可されたもの。そういうわけで現代も境内には相撲に関する歴史物が多々残されている。本殿に向かって右奥に横綱記念碑。これは明治に建てられたものだが、谷風や雷電為衛門の名も刻まれている。とりわけ目を奪うのが、二の鳥居を潜った参道の右側に立っている、名力士実物大の円柱である。側に並んで立ってみるとその恐るべき高さが分かる。中でも一際目立つのが、釈迦ヶ嶽の柱石。なんと高さ二メートル二十六センチ。江戸の家は総じて低い、彼は道を歩きながら煙管（キセル）を突きだして、二階の窓から、たばこの火種をもらっ

たといわれる。江戸っ子の平均身長は一メートル五十センチ台。なんという巨人か。雷電も二メートルあったというが、このことだけでも、江戸の関取に寄せる、江戸庶民の畏敬の念が感じ取れる。

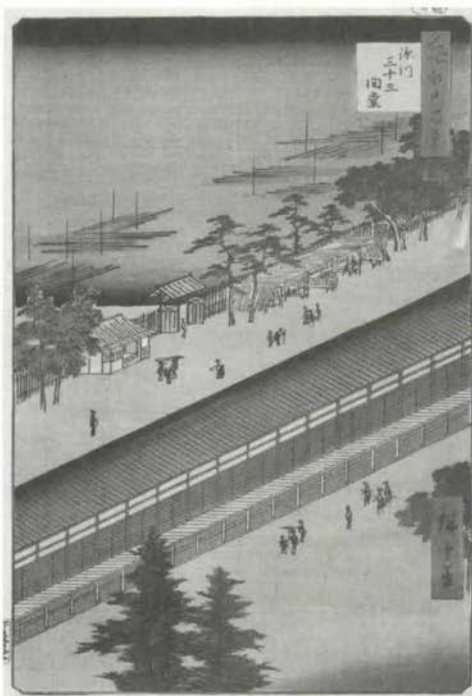
神田祭り、山王祭り、富岡八幡の祭り。これが文字通り、江戸の三大祭りである。八月十五日。富岡八幡の千貫神輿（みこし）が練り出される。通称、水掛祭り。なにしろ夏の真っ盛りに巨大な神輿を他とは比較にならぬ大勢の担ぎ手が群がるので水を浴びせて少しでも涼を取るのである。神輿は次々と宮出しされ、門前仲町を練り歩く、神輿と大勢の担ぎ手指して、沿道の人々は水を撒く。水しぶきの中を練り歩くのである。紀伊屋文左衛門が金に糸目をつけず拵え、寄進したという三基の宮神輿は、関東大震災で焼失するまで江戸っ子の華であった。現代では一宮、二宮、二基の宮神輿が参道左の神輿蔵に納められている。その偉容は文字通り日本一の姿である。一宮は二

江戸を歩く

◆横綱記念碑



◆駅廻ヶ嶽等身大の柱石



◆広重「三十三間堂」

階のような高さで（四メートル四十センチ）、重さは四・五トン。二宮も二トン。随所に純金宝石が散りばめられた豪華絢爛の神輿は一見に値する。一宮は一度担がれたがあまりの担ぎ手の人数の多さと、高さで鳥居を潜れず、

分解して道に出たという。この時の光景はさまざま、宮、鳥居、門前仲町通りまで人のかたまりで立錐の余地もない。以後、二宮神輿が祭りの主役になった。今日でも五十数基の町内神輿が列を成して永代橋に向かう様は壮観である。消防車が水をかけ、町内の人々が総出でバケツにくんだ水を神輿に浴びせる。

神輿の列は二の鳥居を潜ると馬場道に出て永代寺門前町を左右に見て永代橋に向かう。一の鳥居を潜り、八幡橋、福島橋を渡り、大川沿いに出て、北に転じ、相川町、佐賀町を通り、永代橋東詰に出る。それから永代橋を渡御し、靈巖島、箱崎町につく。つまり、これまで歩いてきた散歩道を辿るわけである。今の永代橋は、江戸期の永代橋の百メートル

下方にあり、永代通りとなって福島橋から真っ直ぐ、この橋に伸びている。江戸時代の道は御船手組屋敷を回って橋の東詰めに出たことになる。

永代橋落橋事故

祭りには本所、深川町民はもとより、大げさに言えば江戸中の人々が参加し大変な混雑を呈する。そうした中で起きたのが永代橋落橋事故である。文化四年（一八〇七）、富岡八幡十二年ぶりの祭礼日に詰めかけた大群衆で橋は満タン状態になり、人々の重みで橋の中央やや東より部分が崩壊。押し寄せた群衆は歯止めがきかず、後ろから押されて次々と大川に投げ出され、なんと死者千五百人の、史上最悪の落橋事故になった。この模様は、落語「永代橋」や滝沢馬琴の小説に描かれている。群衆は橋の崩壊部分が見えず、後ろから押される。やむなく南町同心、渡辺小佐衛門が抜刀し、刀を振り上げ、寄らば切るぞと

大声を上げ、立ちふさがる。これに恐れを成して、ようやく群衆が後に下がり、ことなきをえたという漸である。馬琴は次のように表現する。「前に進みしものの、橋おちたりと叫ぶをもきかで、せんかたなかりしに、一個の武士あり、刀を引き抜きてさし上げつつうち振りしかば、人みなおそれてやうやく後へ戻りしとぞ」。とにかく当時の江戸っ子にとっては大事件で、太田南畝も狂歌を作っている。「永代と かけたる橋は落ちにけり きようは祭礼 あすは葬礼」。死者は油堀東の海福寺で弔われた。深川寺町は仙台堀渡辺橋から油堀富岡橋までの南北に八寺が連なり、ほぼ中央に海福寺がある。江戸名所図会にも描かれるほど壮麗な伽藍配置である。黄檗宗のこの寺は明治になって目黒の羅漢寺右隣に移転。階段を上すると左に当時の大きな供養塔が建ち、今日も死者の御霊を弔っている。

三十三間堂の通し矢

富岡八幡の堀を隔てた東に三十三間堂がある。京都蓮華王院の三十三間堂とそっくり同じ規模で元禄期に建てられたもの。南北六十六間（約百二十メートル）、東西四間（約七メートル）の細長い建物で観音様を祀っているが、西側の廊下では、京都と同じく通し矢が行われた。この三十三間堂は、元は武士の射術稽古のために浅草東本願寺近くに建てられたが、元禄十一年、火災で焼失。この深川に再建された。通し矢は、その日の夕刻から始まり、翌日の夕刻にかけて一昼夜、夜を徹して行われ、廊下と天井ひさしの狭い空間を北の的をめがけて、百二十メートル射通す。京都と全く同じく、この空間を通った矢の数を競う。そして最も多くの矢を射通した武士の姓名と本数が絵馬に記録され、本堂に掲げられ、讃えられる。広重の「深川三十三間堂」は、その東の木場に浮かぶ材木をも描き、真に美しい光景である。

【参考文献】

「江戸名所図会」角川書店
 「広重の大江戸名所百景散歩」人文社
 「江戸史跡事典」新人物往来社
 「東京路上細見」平凡社
 その他

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●八

〔特選〕熊さんも八つあんも春立ちにけり

内藤 隼人

八つあんも熊さんも、落語には欠かせない人物である。大家さんや御隠居さんとおもしろおかしく話が展開されていく。そういう話がよく似合いそうな町筋なのだろう。そんな所にもようやく春が来たのである。

〔佳作〕ハイヒール銀座八丁暖かし

柄本 圭子

隣る家八ツ手の花の咲き競う

山口 信子

花八ツ手地縁血縁大切に

松尾三重子

●年

〔特選〕男装の麗人にして年男

目黒 裕

男が女になったり、女が男になったりできる世の中である。そういうのが臆面もなくテレビに出てくるが、これは明らかに女性であ

る。この女性が男の厄年だという。頭が変になるようなおかしい一句である。

〈佳作〉

晩学の一書たゞえ去年今年

河合富美枝

すこし病みすこし素直に年始め

さとうゆう

年立つや海に向ふに遠き富士

中村 真一

●自由題

〈特選〉

発つ船に冬月光る波がしら

一丁田美恵

夜になつてからの出航である。銅鑼が鳴り響き紙テープが舞うといえは、舞台は揃う。出航した船に冬の澄みきつた月は、きらきらと波頭をきらめかす。航路の無事は保証されているように思われる。

〈佳作〉

子規がいて三平がいて角の梅

千駄木敏郎

買い物の手押し車に時雨降る

浦田 ちゑ

一湾の日溜まり温し鵜の声

谷 しげ子



浄土誌上句会のお知らせ

兼題

季節ではありません

会期自由題

誌上句会〈編集部選〉

■八

自分史の稿八枚や霜の夜
人通り途絶え八卦の灯の寒さ
のらくろも蛸の八ちゃん懷慕かな
八百をとうに超えたる嘘や春
春陰や八つ墓村に鴉群れ
石鹼とおんなじ色で八重椿
甲八号十七側の梅は白
棟梁は八の字眉毛春寒し
路味噌の八年前のことと思う
余寒かな七八はある山の瘤

河合富美枝
中島富士子
飯島英徳
工藤 掉
斉田 仁
目黒 裕
濱野具円
鍋谷宗治
濱野東人
町村亮一

締切・二〇一一年四月二十日

発表・『浄土』二〇一一年八月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■年

晩学の一書たずさえ今年去年
年詰る事の順序の行違ひ
海に千年山に千年山椒魚
水温む日々なり亀屋万年堂
半仙歳年を数えるように漕ぐ
郷土史に年表は無し春寒し
年内は無休の木札落ちていて
五千年前海だった坂の春
ぴかぴかの一年生は春の歌

■自由題

味噌汁の具のたつぷりと冬隣
八重桜固い蕾は陽にはえて
コンクリの春塵を練る機械かな
団子焼く耳のかたち春の風
石屋から猫が出てくる寒さかな
春近くして鍵盤は光る海
花屋から流れる水も春の水
粉練って折ってたたんで春隣
早春の日当たる墓地を猫通る
漉餡の薄紫の余寒かな
立春や大吉という寺の犬
歩数計持って陽だまり拾いつつ

河合富美枝
中島富士子
斉田 仁
笠井亜子
村田 篠
鍋谷宗治
紺野 敬
町村亮一
相川祐司

河合富美枝
中島富士子
鈴木伊豫
中嶋いづる
濱野東人
村田 篠
斉田 仁
笠井亜子
小林苑を
工藤 掉
紺野 敬
森 弘三

29 かい目 さっちゃんはネッ

かまちのひろ



かまちのひろ先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



一族の彼岸の墓を巡り来て

岱潤

の素晴らしさにただただ感激していた。

そして十四日から東京でも計画停電と

三月十一日、千年に一度と言われる未曾有の大地震が起きた。東京の我が寺でも、本堂の瓦が落ちたり、灯ろうが倒れたり大騒ぎをしていたが、テレビの画面に映し出される津波の恐ろしさに言葉

交通機関の運行の縮小が始まるうとして。各自が各家でしっかりと節電することが求められ、我が家でも必要最小限以外のコンセントをすべて抜いて歩いた。

トイレ、換気扇、エアコンなど実に多くのコンセントで電気を使っていたことが

はない幸せを考えることができるようになったように思われる。

あまりにもつらい悲しみの現実の中で、一筋の光を見出すとすれば、そういうことかもしれない。

(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

苦しい時間を過ごした。自分が被災地に行くことなどもちろんできないが、救助に奔走される自衛隊員や消防隊員、消防団員、警察官、役場など行政の方々、そして原子力発電所で身の危険と隣り合わせの中活動される作業員の方々など、そ

今この国の国家像が大きく変わるうとしてるように思われる。繁栄と豊かさの中、「痛み」と「苦しみ」を忘れてしまった国民が、今しつかりとその「痛み」と「苦しみ」に向き合っている。経済の発展ばかりを考えてきた国民が、そうで

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

二・三月合併号の「法然上人をめぐる人々」の18・24ページのイラストレーターは佐野芳朗師でした。

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

浄土

七十七巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年三月二十日

発行 平成二十三年四月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 西明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八・六九四七

FAX 〇三(三三)五七八・七〇三七

振替 〇〇二八〇・八・八二八七

東大寺指図堂

東大寺は天平21（749）年、聖武天皇の勅願により建立されました。治承4（1180）年、平重衡の兵火により焼失。この復興にあたって当初、法然上人への依頼がありましたが、法然上人はその任にあらずと断り、代わりに俊乗房重源上人を紹介したとされています。そして建久元（1190）

年、その重源上人の招請により、法然上人は、まだ再建途上の東大寺において、浄土三部経を講じました。この絵はその時の模様を描いたものです。時下って永禄10（1567）年、再び大仏殿焼失。大仏殿の復興設計図を展示する御堂が建てられ、これが指図堂の由来となったのです。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方 こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方 こうるじっぽう
600円(税別)



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 500円(税別)

中浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より